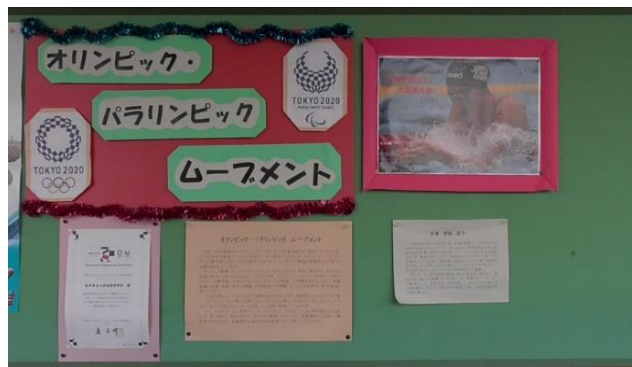


平成 29 年度 スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業報告書



早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

(WASEDA RESEARCH CENTER FOR OLYMPIC & PARALYMPIC EDUCATION)

平成 30 年 3 月

本報告書は、スポーツ庁委託「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」として、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターが実施した平成 29 年度の事業成果を取りまとめたものです。

したがって、本書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要となります。

はじめに

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター（WASEDA RESEARCH CENTER FOR OLYMPIC & PARALYMPIC EDUCATION：以下、早大オリ・パラセンター）は、スポーツ庁が推進する「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」の委託を受けて、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントを全国に波及させることを目的に2016（平成28）年7月に設立されました。

昨年度に引き続き、本センターでは、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会の成功に向けて、オリンピック・パラリンピック競技大会並びにスポーツに対する市民の理解を深め、その興味・関心を高めることを目的として活動を行って参りました。今年度は、昨年度の岩手県、広島県、熊本県に、新たに静岡県、岐阜県、札幌市を加えた5県1市のオリンピック・パラリンピック教育推進地域（以下、オリ・パラ教育推進地域）の教育委員会の方々と連携し、当センタースタッフ一同が一丸となって、オリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育）の一層の推進に努めて参りました。

今年度の主な活動内容と致しましては、以下にお示しする通りです。

- ① オリ・パラ教育推進地域を対象としたセミナー並びにワークショップの開催及び支援
- ② オリ・パラ教育推進校の児童・生徒を対象としたオリンピック・パラリンピック教育の支援
- ③ オリンピック・パラリンピック推進啓発に向けた全国フォーラムの開催
- ④ 本センターのホームページでのオリンピック・パラリンピック教育に資する各種情報提供
- ⑤ パラリンピック教育用デジタル教材の作成
- ⑥ 2018年平昌オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた大韓民国におけるオリンピック・パラリンピック教育の実態に関する調査

今年度は、これらの取り組みを通して、本センターから各オリ・パラ教育推進地域にオリンピック・パラリンピックの魅力やスポーツの素晴らしさを発信することに鋭意、努めて参りました。今年度の本センターの取り組みによって、各地域の児童・生徒、先生方、そして市民の方々がオリンピック・パラリンピックを身近に感じて頂き、また興味・関心を高めて頂ければ、私どもセンタースタッフ一同の望外の喜びでもあります。

末筆になりましたが、本センターの事業推進にあたりまして、多大なご協力を賜りましたスポーツ庁、オリ・パラ教育推進地域の教育委員会の方々、及び関係各位に衷心よりお礼申し上げます。

本報告書は、今年度、本センターが取り組んで参りました各事業についての報告ではありますが、是非ご一読頂き、忌憚のないご意見等を賜れば幸甚に存じます。

平成30年3月

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
センター長 友添 秀則

目次

< 事業概要 >

- 1. 目的と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- 2. 事業体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
- 3. スケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

< セミナー 実施報告 >

- 1. 全国セミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 2. 地域セミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

< オリンピック・パラリンピック教育推進校事業 実施報告 >

- 1. 札幌市 オリンピック・パラリンピック教育推進校・・・・・・・・17
- 2. 岩手県 オリンピック・パラリンピック教育推進校・・・・・・・・20
- 3. 静岡県 オリンピック・パラリンピック教育推進校・・・・・・・・23
- 4. 岐阜県 オリンピック・パラリンピック教育推進校・・・・・・・・26
- 5. 広島県 オリンピック・パラリンピック教育推進校・・・・・・・・29
- 6. 熊本県 オリンピック・パラリンピック教育推進校・・・・・・・・32

< ワークショップ 実施報告 >

- 1. 地域ワークショップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
- 2. 全国ワークショップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

< 全国フォーラム 実施報告 >・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

< 平昌オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた大韓民国における オリンピック・パラリンピック教育の実態調査 実施報告 >・・・・52

< パラリンピック教育用デジタル教材の作成 実施報告 >・・・・・・54

< 事業概要 >

1. 目的と方法

本事業の目的は、地域の人々のオリンピック・パラリンピック競技大会、さらにはスポーツに対する興味・関心を高め、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会の成功に向けての機運を盛り上げることであった。早大オリ・パラセンターは、国内6地域（札幌市、岩手県、静岡県、岐阜県、広島県、熊本県）の教育委員会等と連携して、主に以下の3つの事業を行った。

I. オリ・パラ教育推進地域におけるセミナー並びにワークショップの開催及び支援

学校におけるオリ・パラ教育を推進するために、オリ・パラ教育推進地域の担当者を対象とした全国セミナーを開催した。さらに、オリ・パラ教育推進地域において、オリ・パラ教育推進校の教員を対象とした地域セミナーの支援を行った。各セミナーでは、オリ・パラ教育の理念や実際にオリ・パラ教育を学校で実施するための方法などについて指導を行った。また、各オリ・パラ教育推進地域の実践終了後には、各オリ・パラ教育推進地域におけるオリ・パラ教育に関する情報共有を行うために、オリ・パラ教育推進校の教員を対象とした地域ワークショップの支援を行った。さらに、全てのオリ・パラ教育推進地域におけるオリ・パラ教育に関する情報共有を行うために、各オリ・パラ教育推進地域の担当者を対象とした全国ワークショップを開催した。各ワークショップでは各種学校で実践された教育事業の内容や、オリ・パラ教育の実践を通して明らかになった成果と課題について紹介及び共有を行った。

II. オリ・パラ教育推進校の児童・生徒を対象としたオリ・パラ教育の支援

各オリ・パラ教育推進地域では、教育委員会の方を中心に、いくつかの各種学校をオリ・パラ教育推進校と指定し、本事業を実施した。オリ・パラ教育推進校では、元オリンピック・パラリンピアンが派遣され、講演や実技指導が行われた。講演では、元オリンピック・パラリンピアンにより、オリンピック・パラリンピックの素晴らしさやスポーツの価値について児童・生徒が気付く機会が提供された。実技指導では、児童・生徒がオリンピックやパラリンピック競技種目を実際に体験することで、オリンピックやパラリンピックを身近に感じさせるとともに、パラリンピックや障がい者スポーツに対する理解を深め、関心を高めることが目指された。

III. オリンピック・パラリンピック推進啓発に向けた全国フォーラムの開催

オリンピック・パラリンピックへの機運を高めるための全国フォーラムを開催した。内容は、オリ・パラ教育推進地域の方によるオリ・パラ教育の実践報告と元オリンピック・パラリンピアンによる講演の二部構成で行った。オリ・パラ教育の実践報告では、各オリ・パラ教育推進校の環境に合わせた独自の取り組みを紹介いただいた。元オリンピック・パラリンピアンには、自らの経験をもとにオリンピック・パラリンピックの素晴らしさやスポーツの価値について、シンポジウム形式でお話いただいた。

その他、オリ・パラ教育をより充実したものにするために、ホームページでの情報共有や事前及び事後指導を行うための指導案や教材の提供及びパラリンピック教育のデジタル教材の作成や海外のオリ・パラ教育の実態調査も実施した。

2. 事業体制

本事業は、以下の事業体制に基づいて実施した。

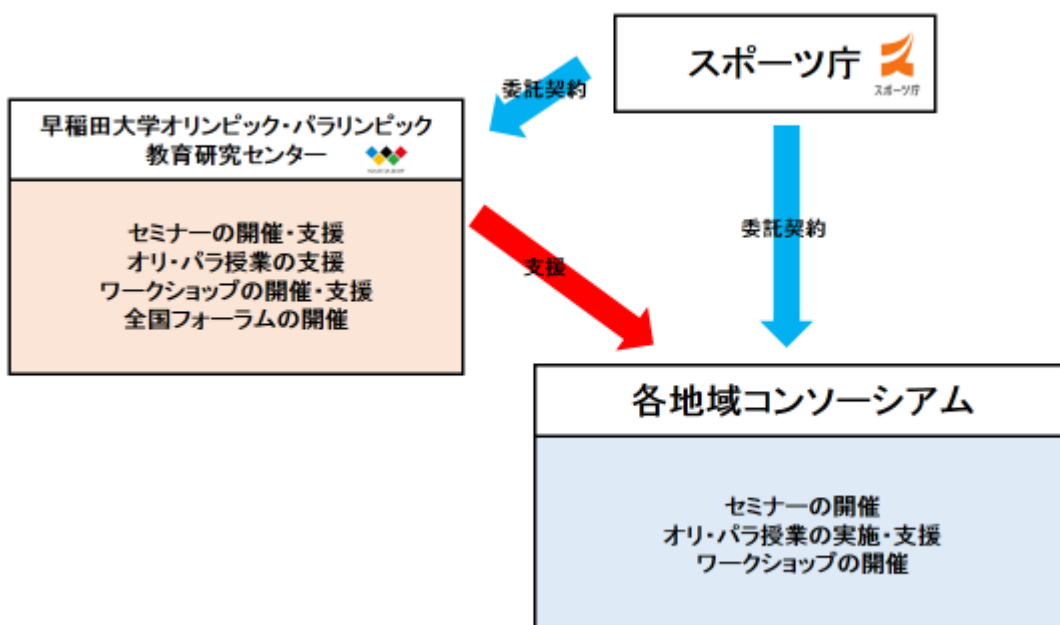
まず、スポーツ庁や2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会などで構成された、以下のようなオリンピック・パラリンピック教育全国コンソーシアム（全国中核拠点）を結成した。

＜全国中核拠点 組織図＞



さらに、スポーツ庁と各オリ・パラ教育推進地域が直接委託契約を結び、早大オリ・パラセンターをはじめとする全国中核拠点の大学がそれぞれ担当する地域を支援するという、以下のような体制が整備された。

＜全国中核拠点と地域拠点の関係図＞



3. スケジュール

本事業は、以下のスケジュールに沿って実施した。

＜本事業の実施スケジュール＞

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
事業内容		全国セミナー開催			平昌調査						地域ワークショップ支援	
				地域セミナー支援								
								オリ・パラ教育 実践支援		全国フォーラム 開催	全国ワーク ショップ開催	
					パラリンピック用デジタル教材の作成							報告書作成

＜中核拠点会議スケジュール＞

- ・第1回中核拠点会議：4月14日（金）
年間スケジュールの確認、関係団体の取り組みの情報共有、全国セミナーの概要確認、元オリンピック・パラリンピアンへの派遣について
- ・第2回中核拠点会議：6月22日（木）
地域拠点二次募集結果の報告及び担当拠点の決定、第1回全国セミナーの振り返り、各団体からの報告、地域セミナーの実施状況
- ・第3回中核拠点会議：10月16日（月）
マスコット投票について、各中核拠点の進捗状況、全国ワークショップについて、スポーツ庁からの報告（次年度予算等）、各関係団体の報告
- ・第4回中核拠点会議：12月22日（金）
各中核拠点の進捗状況、全国ワークショップについて、スポーツ庁からの報告（次年度予算案、今年度新事業等）、各関係団体の報告

< セミナー 実施報告 >

1. 全国セミナー

【 第1回 全国セミナー 】

日時：2017（平成29）年5月8日（月）14時00分～17時00分

会場：筑波大学東京キャンパス文京校舎 119 会議室

主催：筑波大学、日本体育大学、早稲田大学

参加者：約 40 名

プログラム：

14:00～14:05 開会挨拶

スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課 課長 勝又 正秀 氏

14:05～14:35 全体概要

筑波大学 体育系 教授 真田 久 氏

14:35～15:20 各学校段階のオリンピック・パラリンピック教育について

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

研究員 岡田 悠佑 氏

日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

特別研究員 秋和 真澄 氏

筑波大学 体育系

准教授 宮崎 明世 氏

15:20～15:35 教材紹介

宮崎 明世 氏

15:35～16:05 関係団体事業の説明

16:05～16:15 休憩

16:15～17:00 各大学と教育委員会担当者との打ち合わせ

開会行事では、スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課の勝又氏より挨拶があり、続いて筑波大学教授の真田氏より、本事業の概要が説明されました。続いて、各学校段階のオリ・パラ教育について全国中核拠点である早稲田大学、日本体育大学、筑波大学から昨年度の実践例を含めた紹介が行われ、筑波大学准教授の宮崎氏より、実際にオリ・パラ教育を実施する際に参考となる「スポーツ庁指導参考資料」、「東京都教育委員会オリンピック・パラリンピック学習読本」、「Olympic Values Education Programme」、「I'm POSSIBLE」の紹介がありました。さらに、大会組織委員会、東京都、内閣官房、パラリンピックサポートセンターからオリ・パラ教育に関連する事業の説明がありました。最後に、別室に移動し、全国中核拠点となっている各大学と地域拠点の担当の方で打合せを行いました。事業計画の内容、手続きの進め方、さらには現段階で困っている点を共有し、オリ・パラ教育の推進に向けて協力体制を築いていくことを確認しました。

【 第2回 全国セミナー 】

日時：2017（平成29）年7月6日（木）14時00分～17時00分

会場：筑波大学東京キャンパス文京校舎 120 会議室

主催：筑波大学、日本体育大学、早稲田大学

参加者：45 名

プログラム：

14:00～14:05 開会挨拶

スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課 課長 勝又 正秀 氏

14:05～14:25 全体概要

筑波大学 体育系 教授 真田 久 氏

14:25～14:40 地域セミナーについて

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
研究員 岡田 悠佑 氏

14:40～14:55 オリンピック・パラリンピック事例紹介

日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
特別研究員 秋和 真澄 氏

14:55～15:10 オリンピック・パラリンピック啓発推進へ向けた授業実践事例紹介

筑波大学 体育系 准教授 宮崎 明世 氏

15:10～15:25 教材紹介

筑波大学 体育系 准教授 宮崎 明世 氏

15:25～16:10 関係団体事業の説明

16:10～16:15 休憩・移動

16:15～17:15 各大学と教育委員会担当者との打ち合わせ

開会行事では、スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課課長の勝又氏より挨拶があり、続いて筑波大学教授の真田氏より、本事業の概要が説明されました。さらに本研究センター研究員の岡田氏より地域セミナーについて、日本体育大学特別研究員の秋和氏より元オリンピック・パラリンピアンへの派遣による授業実践例について、そして筑波大学准教授の宮崎氏より元オリンピック・パラリンピアンへの派遣以外の実践例紹介について、発表を行いました。さらに宮崎氏より、実際にオリ・パラ教育を実施する際に参考となる「スポーツ庁指導参考資料」、「東京都教育委員会オリンピック・パラリンピック学習読本」、「Olympic Values Education Programme」、「I'm POSSIBLE」の紹介がありました。さらに、大会組織委員会の勝本氏、東京都教育庁の荒川氏、内閣官房の金子氏、パラリンピックサポートセンターの山本氏より、オリ・パラ教育に関連する事業の説明がありました。最後に、全国中核拠点となっている各大学と地域拠点の担当の方で別室に移動し打合せを行いました。事業計画の内容、手続きの進め方、さらには現段階で困っている点を共有し、オリ・パラ教育の推進に向けて協力体制を築いていくことを確認いたしました。

2. 地域セミナー

【 札幌市 セミナー 】

日時：2017（平成 29）年 8 月 16 日（水）9 時 45 分～11 時 30 分

会場：札幌市生涯学習総合センター「ちえりあ」

主催：札幌市コンソーシアム、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：149 名

プログラム：「今、札幌の子どもに伝えたい！～オリンピック・パラリンピックから得たもの～」

9:45～9:50 開会挨拶と登壇者紹介

コーディネーター	北海道教育大学 岩見沢校 教授	山本 理人 氏
パネリスト	日本パラリンピアンズ協会 理事	永瀬 充 氏
	バレーボール元日本代表	成田 郁久美 氏
	早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター	
	主幹研究員	吉永 武史 氏

9:50～10:40 対談Ⅰ：スポーツとの出会いとオリンピック・パラリンピックの思い出

10:40～11:15 対談Ⅱ：スポーツの魅力

11:15～11:30 対談Ⅲ：札幌の子どもたちに伝えたいこと

開会行事では、司会より開会の挨拶があり、続いてパネリストの紹介がありました。



会場の様子



山本 理人 氏

対談Ⅰでは、パネリストがスポーツと出会い、オリンピック・パラリンピック出場に至るまでのお話をいただきました。永瀬氏からは、自らが障がいを負うまでの経緯、雑誌をきっかけにアイススレッジホッケー（現パラアイスホッケー）に出会ったこと、そしてパラリンピックではそれまで3大会連続5位だったがバンクーバー大会で初めて2位になりメダルを獲得した時のことについてお話いただきました。成田氏からは、小学校4年生のときに担任の先生の誘いでバレーボールを始め、小学校6年生のときに全国優勝したこと、高校では寮生活でほぼ毎日練習に励んだこと、日本代表に選ばれた際には自

分の役割や得意なプレーを強みとして活かすことができたこと、そしてオリンピックシドニー大会への出場権を逃したときにメディアから批判されて辛かったときのことなどについてお話しいただきました。吉永氏からは、オリンピック・パラリンピックが社会変革の契機になることや子どもに感動を与える可能性を持っていること、本事業の概要、昨年度のオリ・パラ教育の効果についてお話しいただきました。



永瀬 充 氏



成田 郁久美 氏



吉永 武史 主幹研究員

対談Ⅱでは、特にパラリンピックの種目について永瀬氏よりクイズ形式で紹介していただきました。学校の部活動を中心とする日本の子どものスポーツ環境では、パラスポーツの普及が遅れており、パラリンピアンが中心となって少しずつ活動の幅を広げて普及を進めていきたいというお話をさせていただきました。

対談Ⅲでは、いま子どもに伝えたいことをそれぞれのパネリストからお話しいただきました。永瀬氏からは「障がいは車いすに乗っていることではなく、車いすに乗っている人を阻む壁（社会）である」という考えから、その壁を変えていくためにパラリンピックがもつ可能性は大きいということをお話しいただきました。また、次期学習指導要領に「パラリンピック」が入ることやパラリンピックの教材（「I'm Possible」）が開発されていることなどから、学校教育の中でパラリンピックが取り上げられることへの期待についてもお話しいただきました。成田氏からは、「スポーツは心をつなぐことが大切である」という考えから学校教育におけるスポーツ活動の充実の重要性についてや、自らも積極的に子どものスポーツ活動を促進する活動をしていきたいという抱負についてお話しいただきました。吉永氏からは、オリ・パラ教育が人々の多様性を理解するためのよい材料になること、そして札幌市は冬季オリンピックを開催した都市であり、「札幌オリンピックミュージアム」という貴重な施設も有していることから、オリンピック・パラリンピック教育の新しい取り組みに期待がもてることをお話しいただきました。最後に山本氏から、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会は一つの契機であり、この大会をどう活用し何が後世に残せるのかということが重要であるということをお話しいただきました。また、学校における具体的なオリ・パラ教育の展開に関しては今後の課題であり、参加された先生方にかかっているという激励の言葉を頂き、閉会となりました。



札幌オリンピックミュージアム



対談の様子



パネリストの集合写真

【 岩手県 セミナー 】

日時：2017（平成 29）年 10 月 30 日（月）14 時 00 分～16 時 30 分

会場：アイーナ岩手 701 会議室

主催：岩手県教育委員会、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：18 名

プログラム：

- 14:00～14:05 開会の言葉 岩手県教育委員会保健体育課 総括課長 荒木田 光孝 氏
- 14:10～15:10 オリンピック・パラリンピック教育について
早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
センター長 友添 秀則 氏
- 15:10～15:20 休憩
- 15:20～16:10 学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の指導方法について
早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
研究員 岡田 悠佑 氏
- 16:10～16:20 質疑応答
- 16:20～16:30 連絡事項

開会行事では、岩手県教育委員会保健体育課総括課長の荒木田光孝氏より主催者挨拶がありました。



荒木田 光孝 氏



会場の様子

次に、本センター長の友添氏より、「オリンピック・パラリンピック教育について」というテーマで、本事業の目的や意義の説明がありました。加えて、オリンピック・パラリンピックの歴史を振り返りながら、オリ・パラ教育の可能性や学習指導要領におけるオリ・パラ教育の位置づけについての説明も行なわれました。

続いて、本センター研究員の岡田氏より、「学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の方法について」というテーマで、学校でオリ・パラ教育を実施する方法についての説明がありました。オリ・パラ教育にはオリンピック・パラリンピックに「ついでに学び」と、オリンピック・パラリンピックを「通した学び」という2つの学びの形式があることを説明した後、実際に授業等で活用できる「オリンピック・パラリンピックノート」(WASEDA ROPE)、「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料」(スポーツ庁)、「I'm POSSIBLE」(日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター)を提示しながら、オリ・パラ教育の具体的な実践例の紹介がありました。また、今回はパラリンピック教育の教材である「I'm POSSIBLE」に関して、パラリンピックサポートセンターの方が登壇し、活用方法や効果について映像等を用いながら説明がありました。



友添 秀則 センター長



岡田 悠佑 研究員

最後に、岩手県教育委員会の菊池勝寛氏からご挨拶をいただき、閉会となりました。閉会後に、参加いただいた先生方や主催の岩手県教育委員会の先生方と写真撮影をして散会となりました。



集合写真① (ご参加頂いた先生方)



集合写真② (教育委員会の方々)

【 静岡県 セミナー（静岡県オリ・パラ教育推進委員会） 】

日時：2017（平成 29）年 10 月 30 日（月）10 時 00 分～12 時 00 分

会場：伊東市観光会館ホール 2 階楽屋

主催：静岡県教育委員会、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：8 名

プログラム：

開会挨拶 静岡県教育委員会事務局 健康体育課 全国高校総体推進室長 朝倉 徹 氏

議事内容

（1）事業内容について

スポーツ庁オリパラ事業概要説明、昨年度までの実践例紹介

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

副センター長 深見 英一郎 氏

静岡県オリパラ事業概要説明

静岡県教育委員会事務局 健康体育課 学校体育班 教育主査 鈴木 淳矢 氏

（2）教育推進校の実践について

（3）今後のオリパラ教育の進め方について

（4）質疑応答

静岡県では、「静岡県オリンピック・パラリンピック教育推進委員会」を発足し、県内の学校におけるオリ・パラ教育の推進に努めている。そのため、地域セミナーとして第 1 回推進委員会を開催した。

開会行事では、教育委員会事務局の朝倉氏より主催者挨拶が行われました。続いて、本センター副センター長の深見氏より、事業概要と実践事例の紹介があり、さらに静岡県教育委員会の鈴木氏より静岡県の事業概要の説明が行われた。さらに、具体的な実践校でのオリ・パラ教育の進め方などに関する検討が行われた。

最後に、質疑応答では、学校に招く元オリンピック・パラリンピアンの手配に関してや、学校現場で効果的にオリ・パラ教育を実施するうえでの課題などについて質問が出された。さらに、来年度を見据えた持続可能な取り組みの方法に関しても、学校種間の連携の必要性などの意見が出された。

【 岐阜県 セミナー 】

日時：2017（平成 29）年 7 月 13 日（木）13 時 30 分～16 時 00 分

会場：岐阜県庁 11 階 教育委員会室

主催：岐阜県教育委員会、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：7 名

プログラム：

- 13:30～13:35 「開会の言葉」 岐阜県教育委員会 課長 野田 正明 氏
- 13:35～13:55 「オリンピック・パラリンピック教育について」
早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
副センター長 深見 英一郎 氏
- 14:00～14:25 「岐阜県におけるオリンピック・パラリンピック教育について」
岐阜県教育委員会体育健康課 学校体育係 課長補佐兼係長 上田 和伸 氏
- 14:25～14:30 休憩
- 14:30～14:50 「学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の指導方法について」
早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
研究員 岡田 悠佑 氏
- 14:50～15:00 質疑応答
- 15:00～15:50 推進指定校の実践計画の作成
- 15:50～16:00 連絡事項

開会行事では、岐阜県教育委員会課長の野田氏より主催者挨拶があり、続いて本センター副センター長の深見氏より、オリ・パラ教育の目的や学習指導要領におけるオリンピック・パラリンピックの位置づけなど、オリ・パラ教育事業の概要が説明されました。



野田 正明 氏



深見 英一郎 副センター長

続いて、岐阜県教育委員会体育健康課学校体育係課長補佐兼係長の上田氏より、「岐阜県におけるオリンピック・パラリンピック教育について」という題目で、岐阜県の事業計画についてお話しをいただきました。具体的には、オリ・パラ教育における2つの学び（「オリンピック・パラリンピックについての学び」と「オリンピック・パラリンピックを通じた学び」）を実現するために、校内の実行委員会を設定することや、最終的な報告書の作成までの計画、さらには予算の使い方などについて説明をしていただきました。

さらに、休憩の後、本センター研究員の岡田氏より、「学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の方法について」という題目で、具体的に学校でオリ・パラ教育を実施する方法についてお話ししました。具体的には、オリ・パラ教育における2つの学びを学校で実現するにはどのように行えばよいのかという点について、具体的な教材である「オリンピック・パラリンピックノート」(WASEDA ROPE)、「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料」(スポーツ庁)、「I'm POSSIBLE」(日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター)を提示しながら詳しく説明しました。



上田 和伸 氏



岡田 悠佑 研究員

さらに、質疑応答の後、ご参加いただいた7名の先生方を2つのグループに分け、各教科でのオリンピック・パラリンピックの教材化及び元オリンピック・パラリンピアンの方に学校に来ていただいて講演や実技指導をしていただく際の事前、事後学習についてワークショップを行いました。特に、事後学習に関しては、来ていただいた元オリンピック・パラリンピアンについての調べ学習や講演の感想文だけでなく、元オリンピック・パラリンピアンを目標にした体育の授業実践や、体育意外の教科で取り上げる方法など、様々なアイデアが出ました。また、高等学校普通科と特別支援学校が連携してオリ・パラ教育を実施するなどの校種を超えた新しい取り組みのアイデアも出ました。最後に、上田氏から閉会のご挨拶をいただき散会となりました。



ワークショップの様子



主催者集合写真

【 広島県 セミナー 】

日時：2017（平成 29）年 7 月 3 日（月）13 時 30 分～16 時 15 分

会場：情報プラザ

主催：広島県教育委員会、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：29 名

プログラム：

- | | | |
|-------------|-------------------------------|--|
| 13:30～13:35 | 開会の言葉 | 広島県教育委員会 係長 光橋 健 氏 |
| 13:35～14:00 | 広島県のオリンピック・パラリンピック教育 | 広島県教育委員会 指導主事 吉岡 智厚 氏 |
| 14:00～14:25 | オリンピック・パラリンピック教育について | 早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
副センター長 深見 英一郎 氏 |
| 14:25～14:40 | 休憩 | |
| 14:40～16:00 | 学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の方法について | 早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
研究員 岡田 悠佑 氏 |
| 16:00～16:05 | 事務連絡 | |
| 16:05～16:10 | 挨拶 | 広島大学大学院教育学研究科 教授 齋藤 一彦 氏 |
| 16:10 | 閉会 | |

開会行事では、広島県教育委員会事務局教育部スポーツ振興課学校体育係係長の光橋氏より主催者挨拶があり、続いて広島県教育委員会事務局教育部スポーツ振興課学校体育係指導主事の吉岡氏より、広島県のオリ・パラ教育事業の概要が説明されました。



開会前の様子



吉岡 智厚 氏

続いて、本副センター長の深見氏より、「オリンピック・パラリンピック教育について」という題目で、お話をしました。まず、本事業の説明と広島県の事業計画について説明しました。具体的には、本事業の目的は、昨年度から引き続き、2020 年に向けて、オリンピック・パラリンピックへの国民の関心を高め、スポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材を育成するために全国各地においてオリ・パラ教育を推進することであることを説明しました。さらに、今年度の広島県は、児童・生徒のスポーツに対する学びを深めることを具体的な事業の目的としていることを確認しました。さらに、コンソーシアムの組織作りやオリンピック・パラリンピックの価値を説明したうえで、現在改訂が進められている学習指導要領におけるオリンピック・パラリンピック教育の位置づけを整理し、これからますますオリ・パラ教育の重要性が高まっていくことを説明しました。

さらに、休憩の後、本研究員の岡田氏より、「学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の方法について」という題目でお話をしました。まず、オリ・パラ教育には「～についての学び」と「～を通じた学び」という2つの学びが存在することを説明しました。そして、それぞれの学びを学校で行うにはどのように行えばよいのかという点について、具体的な教材である「オリンピック・パラリンピックノート」(WASEDA ROPE)、「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料」(スポーツ庁)、「I'm POSSIBLE」(日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター)を提示しながら詳しく説明しました。全ての発表終了後には、広島大学大学院教育学研究科教授の齋藤氏よりご挨拶をいただき、閉会となりました。



深見 英一郎 副センター長



岡田 悠佑 研究員



齋藤 一彦 氏



集合写真

【 熊本県 セミナー 】

日時：2017（平成 29）年 11 月 7 日（火）14 時 00 分～16 時 40 分

会場：水前寺共済会館 グレーシア 2 階 孔雀

主催：熊本県教育庁、NPO 法人ひとづくりくまもとネット、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：34 名

プログラム：

14:00～14:10 開会の言葉 熊本県教育庁教育指導局 体育保健課長 西村 浩二 氏

14:10～14:45 オリンピック・パラリンピック教育の概要について
早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
副センター長 深見 英一郎 氏
研究員 岡田 悠佑 氏

14:45～15:00 休憩

15:00～16:30 パラスポーツの可能性

パラリンピックアテネ・北京・ロンドン大会
ウェルチェアーラグビー日本代表 三阪 洋行 氏

16:30～16:35 閉会の言葉

熊本大学教育学部生涯スポーツ福祉課程教授兼
NPO 法人ひとづくりくまもとネット理事長 中川 保敬 氏

16:35～16:40 連絡事項

開会行事では、熊本県教育庁教育指導局体育保健課長の西村氏より、開会の挨拶がありました。



西村 浩二 氏



会場の様子

次に、本センター副センター長の深見氏の挨拶の後、本センター研究員の岡田氏より、「オリンピック・パラリンピック教育の概要について」というテーマで、本事業の目的や意義に関する説明がありました。加えて、オリ・パラ教育に関する教材や、これまでのオリ・パラ教育の事例の紹介がありました。

また、今回はパラリンピック教育の教材である「I'm POSSIBLE」に関して、パラリンピックサポートセンターの方が登壇し、活用方法や効果について資料を用いながら説明がありました。

さらに、パラリンピックアテネ大会（2004年）、北京大会（2008年）、ロンドン大会（2012年）にウィルチェアラグビー日本代表として出場された三阪洋行氏より、「パラスポーツの可能性」というテーマで講演が行われました。具体的には、自らが障がいを負うまでのスポーツ経験、障がいを負って感じたこと、ウィルチェアラグビーに出会った経緯、ニュージーランドへの留学に挑戦したときのことについて、多くのエピソードとともにお話されました。また、パラリンピックに日本代表として出場した経験についてもお話をいただきました。さらに、パラリンピックスポーツを通して共生社会を実現するためには、理解、受容、行動が必要であるという三阪氏の考えについてもお話されました。



深見 英一郎 副センター長



三阪 洋行 氏

最後に、熊本大学教育学部教授の中川氏からご挨拶があり、閉会となりました。閉会後に、参加いただいた先生方や主催の熊本県教育庁の先生方と写真撮影をして散会となりました。

セミナーの前後に行ったアンケートからも、多くの先生方が、オリ・パラ教育の重要性を強く感じていることが確認できました。



中川 保敬 氏



集合写真

＜オリンピック・パラリンピック教育推進校事業 実施報告＞

1. 札幌市 オリンピック・パラリンピック教育推進校 実施報告

(1) 2017 年度 札幌市オリンピック・パラリンピック教育推進校一覧

小学校 (40校)	札幌市立三角山小学校 札幌市立平岡公園小学校 札幌市立新陽小学校 札幌市立東苗穂小学校 札幌市立大倉山小学校 札幌市立もみじの森小学校 札幌市立平岡小学校 札幌市立北野小学校 札幌市立常盤小学校 札幌市立山鼻南小学校 札幌市立稲穂小学校 札幌市立福住小学校 札幌市立簾舞小学校 札幌市立盤溪小学校 札幌市立真駒内公園小学校 札幌市立藤の沢小学校 札幌市立美しが丘小学校 札幌市立旭小学校 札幌市立平和通小学校 札幌市立上野幌小学校	札幌市立平岸小学校 札幌市立あいの里西小学校 札幌市立前田北小学校 札幌市立北小学校 札幌市立平岸高台小学校 札幌市立米里小学校 札幌市立八軒西小学校 札幌市立信濃小学校 札幌市立二条小学校 札幌市立伏見小学校 札幌市立西小学校 札幌市立幌西小学校 札幌市立宮の森小学校 札幌市立中の島小学校 札幌市立厚別通小学校 札幌市立東園小学校 札幌市立篠路小学校 札幌市立前田中央小学校 札幌市立豊園小学校 札幌市立澄川小学校
中学校 (4校)	札幌市立東月寒中学校 札幌市立新琴似北中学校 札幌市立真駒内曙中学校 札幌市立中央中学校	
高等学校 (1校)	北海道札幌平岸高校	
特別支援学校 (2校)	札幌市立山の手 養護学校中等部 札幌市立札幌みなみの杜 高等支援学校	
中等教育学校 (1校)	札幌市立札幌開成 中等教育学校	

(計 48 校)

(2) オリンピックミュージアムを活用した実践

- 1 学校名：札幌市立信濃小学校
- 2 実施日時：事前指導（社会科）2017（平成29）年12月12日（火）14:15-15:00
ミュージアム見学 2017（平成29）年12月13日（水）9:45-11:15
事後指導（社会科）2017（平成29）年12月14日（木）13:25-14:10
- 3 対象：事前・事後指導 生徒35名（3年生）
ミュージアム 生徒97名（3年生全クラス）
- 4 派遣元オリンピック：畑中 みゆき 氏
（オリンピック女子モーグル ソルトレイクシティ・トリノ大会 出場）
- 5 授業内容：授業（社会科）、ミュージアムの見学、講演

事前指導として、社会科の小学校3年生の学習内容である「自分の住んでいる地域の観察、調査」に関する单元の中の「公共施設などの場所と働き」を取り上げた授業が行なわれました。公共施設は「みんなのためにつくられた施設」であるという説明を受けたうえで、児童たちは身近な公共施設を挙げていきました。そして、たくさんある公共施設の一つとして「札幌オリンピックミュージアム」を取り上げ、札幌オリンピックミュージアムがどのような意味で「みんなのため」になっているのかを児童に考えさせました。

そして翌日、実際に札幌オリンピックミュージアムに行きました。札幌オリンピックミュージアムでは、オリンピック女子モーグルの畑中氏の講演、ミュージアム内にある体験型の施設の観覧、学芸員の方の説明を聞きながら展示物の観覧、そして大倉山ジャンプ競技場の観覧を行いました。講演において畑中氏は、競技の映像も交えながらオリンピックに出場するためには目標をもって継続的に努力を惜しまないことが大切で、それは普段の生活においても重要である、ということをお話しされていました。体験型の施設の観覧では、スキージャンプやボブスレーなどのアトラクションに積極的に挑戦している様子が見られました。展示物の観覧では、実際のメダルや昔のスキー用具など、普段目にすることがない貴重なものを見ながら、学芸員の方の説明に聞き入っている様子でした。最後に、大倉山ジャンプ競技場の観覧では、その大きさに多くの児童が驚いている様子でした。

さらに翌日、事後指導として、調査で得た情報をもとに、札幌オリンピックミュージアムはどのような施設なのかを考える社会科の授業が行なわれました。まず、児童は観覧しながら書いた自分のメモとパンフレットをもとに、情報を整理していました。そして、先生の「札幌オリンピックミュージアムはどのような施設だったか」という問いかけに、自分のまとめたノートをもとに積極的に手を挙げて回答していました。授業終了後には、授業を実施して下さった先生と授業を観覧いただいた教育委員会等の先生方が集まり授業検討会が開かれました。札幌市独自のオリパラ教育をどのように展開していくのか、という点を中心に活発な議論が行なわれました。

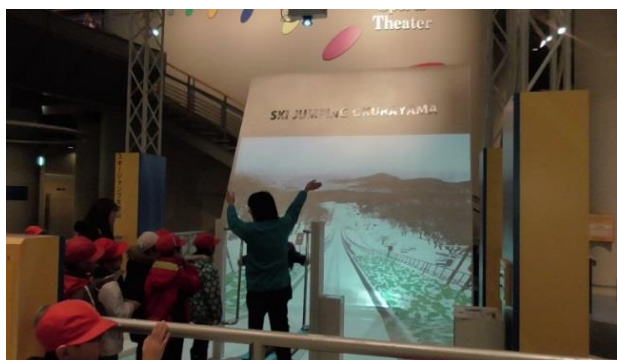
6 授業の様子



ミュージアムでの講演



ミュージアムでの体験①



ミュージアムでの体験②



ミュージアムでの見学



先生が課題を提示している様子



児童が資料をもとに考えをまとめている様子



児童が自分の考えを発表している様子



授業後の検討会

2. 岩手県 オリンピック・パラリンピック教育推進校 実施報告

(1) 2017 年度岩手県オリンピック・パラリンピック教育推進校一覧

小学校 (5 校)	盛岡市立上田小学校 奥州市立田原小学校 一関市立萩荘小学校 宮古市立山口小学校 一戸町立鳥海小学校
中学校 (5 校)	盛岡市立厨川中学校 盛岡市立上田中学校 花巻市立湯口中学校 山田町立豊間根中学校 久慈市立山形中学校
高等学校 (2 校)	岩手県立花巻南高等学校 岩手県立福岡高等学校

(計 12 校)

(2) 体育理論の授業と関連付けた実践

1 学校名：盛岡市立厨川中学校

2 実施日時：事前指導（家庭科） 2018（平成 30）年 1 月 9 日（火）

事前指導（保健体育科） 2018（平成 30）年 1 月 17 日（水） 14:30～15:20

1 月 18 日（木） 11:50～12:40

1 月 19 日（金） 9:50～10:40

講演 2018（平成 30）年 1 月 22 日（月） 13:30～14:40

3 対象：事前指導（家庭科） 全校生徒 635 名

事前指導（保健体育科） 240 名（1 年生全クラス）

講演 全校生徒 635 名 教職員 55 名 保護者 約 25 名

4 派遣元オリンピック：宮下 純一 氏

（オリンピック競泳男子 400m メドレーリレー 北京大会 銅メダル）

5 授業内容：講演

2018（平成 30）年 1 月 22 日（月）に、盛岡市立厨川中学校において、「盛岡市立厨川中学校創立 70 周年記念式典」の一貫として、北京オリンピックにて競泳で銅メダルを獲得された宮下氏による「出会いに感謝～思い続けたオリンピック～」というテーマの講演が行われました。

本講演を受講するにあたり、おもてなしの心を育むことを目的として、家庭科の授業で盛岡市の名産品であるリンゴジャムづくり体験を行いました。この取り組みは、震災で大きな被害を受けた陸前高田市において収穫された「ふじ」という品種のリンゴを使うことで被災地の現状を伝えることも意図していました。また、1 年生全生徒 240 名は、事前に保健体育科の体育理論の授業において、日本チームが銀メダルを獲得したリオデジャネイロオリンピック男子 4×100m リレーを題材に「運動やスポーツの学び方」についての学習を行いました。

講演では、宮下氏の水泳競技との出会いから、オリンピックに出場しメダル獲得に至るまでのエピソードと、人生のターニングポイントとなる大切な人との出会いについてスライドを使ってご紹介いただきました。子どもの頃の宮下氏は、意外にもお風呂で頭を洗う際にはシャンプーハットが必需品だったほど水が嫌いな子だったそうです。そこで、心配した両親によって水嫌いを克服させるために無理矢理スイミングスクールに入れられ、その結果、5 年後の 10 歳の時には水泳で全国大会に出場するまでに至ったそうです。このような水泳を始めた経緯のお話をもとに、「嫌いなことでも継続すればやがて好きになり結果もついてくる」と生徒たちに伝えていました。また中学校時代は、一番水泳が嫌いになった時期だったようです。それは、思春期で最も遊びたい盛りの時期にも関わらず、水泳の大会で良い成績が出るなど伸び盛りであったことから、土日休みなく練習しなければならず、次第に友だちは気を遣って遊びにも誘ってくれなくなりして、当時は、水泳のために大切なものを失っていく気がしたそうです。周囲の人に水泳をやめたいことを相談しても「逃げるな、やめるな、がんばれよ」という返答ばかりだったといいます。しかし、中学校のときの Y 先生だけは、「そうか、嫌ならやめろ。楽しくないんやろ」という思いがけない返答とともに「お前は何のために水泳に取り組んでいるのか。お前に勝ちたいと、お前を目標に一生懸命努力している選手たちに申し訳ないという気持ちはないのか」と諭されたそうです。宮下氏は、「先生に、僕の気持ちが分かるのか？水泳をがんばれば、がんばるほど友だちは離れていく・・・」と正直に言うと、Y 先生からは「壁は越えられる人に訪れる。俺は、お前が乗り越えるところ

ろを見てみたい」と言われたといいます。この出来事を契機に、「自分は本当に何がやりたいのか」、「自分にとって最も大切なことは何か」を考えるようになり、「オリンピックでメダルを取りたい」と本気で考えるようになったそうです。最後に、生徒たちに伝えたいこととして「夢を叶えるために」大切な4つの言葉と、3つの行動目標を紹介されました。4つの言葉とは、1) 明確な夢を持ち続け、決して諦めないこと、2) 人との出会いを大切にすること、3) 自分の気持ち・意思を大切にすること、4) 続けさせてもらっている精神で感謝の気持ちをもつことです。3つの行動目標とは、チャレンジ、チェンジ、チャンスです。宮下氏は、自らの競技生活を通して学んだ4つの言葉と3つの行動目標をもとに、自分にはチャンスがないと思っている人は、実はチャレンジとチェンジができていないために目の前のチャンスに気付いていないのではないか、と生徒に問いかけていました。講演後の質疑応答では、3年生の男子生徒から「もうすぐ高校入試があるのですが、緊張してしまう。どうすればいいか?」という質問に対して、自らのレース前のことを思い出しながら、本番で緊張しないようにするためには地道にしっかりと勉強するしかない、と激励されていました。講演全体を通して、宮下氏は、生徒たちに発問を投げかけたり、生徒と意見交換をするなど、お互いに楽しみながら話しを進められたので、講演の最中は生徒の笑い声と驚きの声が頻繁に聞こえてきました。

6 講演の様子



講演の様子①



講演の様子②



質問する生徒



集合写真

3. 静岡県 オリンピック・パラリンピック教育推進校 実施報告

(1) 2017 年度静岡県オリンピック・パラリンピック教育推進校一覧

小学校 (3 校)	伊東市立八幡野小学校 伊豆の国市立大仁小学校 伊豆市立修善寺南小学校
中学校 (2 校)	伊東市立北中学校 伊豆の国市立大仁中学校
高等学校 (3 校)	静岡県立伊豆中央高等学校 静岡県立伊東高等学校 静岡県立伊豆総合高等学校

(計 8 校)

(2) スポーツ大会を活用した実践

- 1 学校名：伊豆の国市立大仁中学校
- 2 実施日時：2017（平成 29）年 11 月 17 日（金）14：20～16：00
- 3 対象：1 年生 144 名
- 4 会場：伊豆ベロドローム
- 5 事業内容：講演、交流会

2017（平成 29）年 11 月 17 日（金）に、伊豆ベロドロームにて、伊豆の国市立大仁中学校の生徒 144 名とジャパンパラサイクリングカップ 2017（11 月 18 日（土）、19 日（日）開催）に出場する 6 か国（アメリカ、韓国、チェコ、ドイツ、日本、ポーランド）の選手約 20 名との「絆」交流会が実施されました。今回の事業の目的は、「オリンピック・パラリンピックの意義や歴史に関する学びを通して、オリンピック・パラリンピックを身近に感じ、スポーツを通して心と体を鍛え、世界中の人々と交流して平和な世界を築いていこうとする精神を育成する」ことでした。

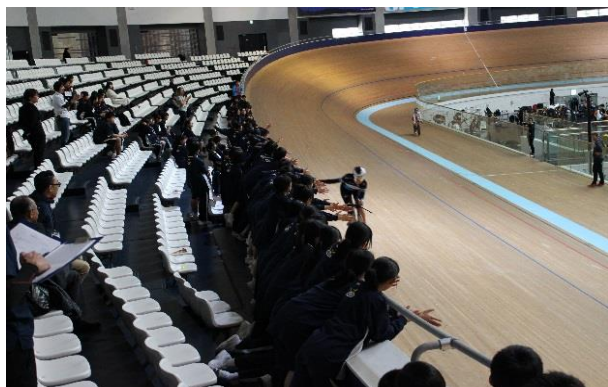
今回の事業を実践するにあたり、生徒たちは 2 回にわたる事前学習を行いました。1 回目は、パラサイクリング交流イベントとして、パラリンピックリオデジャネイロ大会に出場した川本翔大氏（自転車）を大仁中学校にお招きし、自身の経験やパラサイクリング競技のルール等についてお話をいただきました。2 回目は、「絆」交流会に向けて、6 か国の選手への応援メッセージを記した横断幕の作成やパラサイクリングの競技体験を実施しました。

事業当日、生徒たちは、伊豆ベロドロームに入場した後、ジャパンパラサイクリングカップ 2017 大会前日の公開練習を見学しました。公式競技場での選手のパフォーマンスを見て、生徒たちはそのスピードと迫力に興奮を隠すことができない様子でした。また、観客席とコースとの距離が非常に近く、コースの外側を走る外国人選手とハイタッチを交わす姿も見受けられました。他にも、事前学習で作成した横断幕を掲げながら、練習する選手たちに精一杯声援を送っている姿が印象的でした。

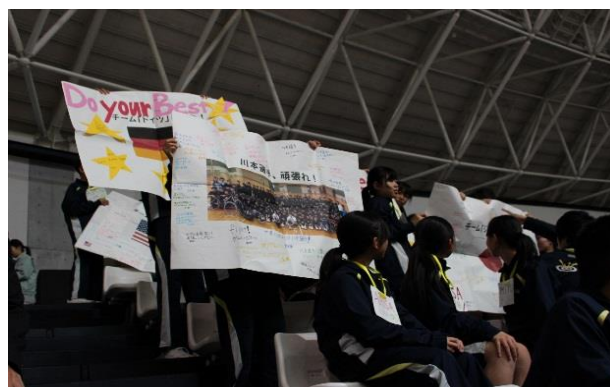
公開練習の見学後、生徒たちは競技場内に移動して、選手たちとの「絆」交流会を行いました。生徒たちは、ローマ字表記の名前と自身の趣味に関する絵をかいた名札を首にさげ、班ごとに指定された 2 か国の選手たちと英語でコミュニケーションを図りました。はじめに、生徒たちが自己紹介をした後、日本や伊豆の国市の文化や歴史について説明を行いました。アメリカ、韓国、チェコ、ドイツの選手に対して、みそ汁や伊豆の国市の温泉でつくられた温泉卵の写真をプリントアウトして、熱心にプレゼンを行ったり、トレーニング用の自転車をこいでいるポーランドの選手に練習内容を尋ねたりする生徒たちの姿がありました。外国人選手に名前を呼んでいただきながら楽しくコミュニケーションを深めている様子が多くみられました。

交流会後の生徒たちは、どこか自信に満ちた表情をしているようでした。今回の事業を通して、オリ・パラ教育による国際交流の可能性を改めて感じることができました。

6 交流会の様子



外国人選手とハイタッチする生徒達



事前学習で作成した横断幕を掲げる生徒達



アメリカの選手と交流する生徒たち



韓国の選手と交流する生徒たち



チェコの選手にサインしてもらう生徒



ドイツの選手と交流する生徒たち



日本の選手と交流する生徒たち



ポーランドの選手と交流する生徒たち

4. 岐阜県 オリンピック・パラリンピック教育推進校 実施報告

(1) 2017 年度岐阜県オリンピック・パラリンピック教育推進校一覧

高等学校 (5 校)	岐阜県立岐阜商業高等学校 岐阜県立大垣南高等学校 岐阜県立関高等学校 岐阜県立恵那高等学校 岐阜県立益田清風高等学校
特別支援学校 (2 校)	岐阜県立岐阜盲学校 岐阜県立岐阜聾学校

(計 7 校)

(2) 盲学校での授業実践

- 1 学校名：岐阜県立岐阜盲学校
- 2 実施日時：2017（平成 29）年 12 月 26 日（月）14：00～15：30
- 3 対象：生徒 12 名（小学部、中学部、高等部）、保護者と教員 10 名
- 4 派遣元パラリンピアン：中嶋 茜 氏
（パラリンピック女子ゴールボール パラリンピックロンドン大会 金メダル）
- 5 授業内容：講演、実技

2017（平成 29）年 12 月 26 日（月）に、岐阜県岐阜盲学校にて、パラリンピックロンドン大会の女子ゴールボールで金メダルを獲得した中嶋氏の講演と実技指導が行われました。岐阜盲学校は、中嶋氏の母校ということもあり、終始温かい雰囲気では進行しました。

「パラリンピックに出場して学んだこと」というテーマで行われた講演は、自己紹介から始まり、中嶋氏がゴールボールを始めたきっかけや日本代表に選ばれるまでの経緯、さらにはパラリンピックロンドン大会に参加したときの思い出などについて、自身の経験や考えを基にお話しされました。もともと運動が苦手だった中嶋氏は、先輩に誘われてゴールボールを始めその楽しさに魅了されていったことから、スポーツを楽しんで欲しいということを強調して伝えていました。一方で、日本代表の選考合宿に召集され、少しずつ競技レベルが高くなる中で、楽しさ以上に勝ちたいという気持ちが湧いてきて隠れて練習をしていたエピソードもお話しされました。そして、練習と勉強の両立をするために時間を有効に活用するように努めた経験から、楽しいだけでなく、日々の努力が大切であることも伝えていました。また、パラリンピックロンドン大会や日本代表の選考合宿などの競技レベルの高いところでゴールボールを行なった経験から、些細なことでも「自分でやれることは自分でやる」という強い気持ちを得ることができたとお話された際には、児童・生徒達だけでなく、保護者の方や先生方からも感嘆の声が聞かれました。

また、児童・生徒達からは、「ゴールボールの楽しいところはどこか」という質問があり、中嶋氏は、「ゲーム自体はシンプルだけれど奥が深い」ところと「アイシェード（ゴールボールを行なう際に、何も見えないように目に装着するもの：筆者加筆）のおかげで障がいの有無に関わらず参加できる」ところを挙げていました。そして、講演の最後には「怖がらずに楽しむところからスポーツを始めてみてほしい」という児童・生徒達へのメッセージを送って講演は終了となりました。

実技指導では、ゴールボールのディフェンスの仕方の練習を行った後に、実際に 1 対 1 のゲームを行いました。最初は、思ったとおりにボールをまっすぐ転がせなかったり、ボールが来るのを予測できずにいた児童・生徒達も、中嶋氏の指導によって少しずつ上手くなっていきました。最後にゲームを行った際には、強いボールを転がしたり、ぎりぎりのところでボールを止めたりする児童・生徒の姿に、周りで見ている先生方や保護者の方から歓声と拍手が送られていました。

最後に、生徒からゴールボールをやってみた感想の発表と代表生徒からの謝辞があり、散会となりました。

6 授業の様子



講演の様子



会場の様子



金メダルを触っている様子



ディフェンスの練習②



ディフェンスの練習②



ボールを転がす際の足の向きの指導



ゲームの様子



感想と謝辞

5. 広島県 オリンピック・パラリンピック教育推進校 実施報告

(1) 2017 年度広島県オリンピック・パラリンピック教育推進校一覧

小学校 (6 校)	尾道市立吉和小学校 東広島市立西条小学校 東広島市立小谷小学校 福山市立霞小学校 福山市立東小学校 海田町立海田小学校
中学校 (6 校)	福山市立内海中学校 尾道市立因北中学校 尾道市立因島南中学校 尾道市立向東中学校 尾道市立御調中学校 東広島市立高屋中学校
高等学校 (17 校)	広島県立賀茂高等学校 広島県立福山葦陽高等学校 広島県立神辺旭高等学校 広島県立府中東高等学校 広島県立広島皆実高等学校 広島県立五日市高等学校 広島県立呉宮原高等学校 広島県立安西高等学校 広島県立湯来南高等学校 広島県立三次高等学校 広島県立世羅高等学校 広島県立尾道商業高等学校 広島県立大崎海星高等学校 広島県立高陽高等学校 広島県立庄原実業高等学校 広島県立呉三津田高等学校 盈進高等学校
特別支援学校 (1 校)	広島県立広島中央特別支援学校

(計 30 校)

(2)実技を中心とした実践

- 1 学校名：広島県立賀茂高等学校
- 2 実施日時：2018（平成30）年1月15日（月）13：20～14：10、14：20～15：10
- 3 対象：生徒160名（1年生、40名×4クラス）
- 4 派遣元オリンピック：市橋 有里 氏
（女子マラソン オリンピックシドニー大会 出場）
- 5 授業内容：講演、実技

2018（平成30）年1月15日（月）に、広島県立賀茂高等学校にて、オリンピックシドニー大会の女子マラソンに出場した市橋氏の講演と実技指導が行われました。授業は、1年生の4クラスを2クラスずつ2回にわけて実施されました。なお、授業の内容は2回とも同じであったため、以下では、1回目の授業を中心に報告します。

授業開始のチャイムとともに生徒のあいさつが行なわれ、担当の先生から市橋氏の紹介と本事業の趣旨説明が行われました。次に市橋氏から、自己紹介とともに、中学校3年生のときにオリンピックに出場するという目標をたててから、実際にオリンピックに出場するまでの苦労や実際にオリンピックに出場したときの思い出などについて講演がありました。講演の最後で、市橋氏は、夢や目標を達成するにはどうしたらよいかを考えながら授業を受けてほしいと述べ、実技指導に移っていきました。

実技指導では、まず始めに準備運動の指導がありました。特に、長距離を走るうえで重要な肩甲骨や股関節をほぐすための動的ストレッチの方法を中心に指導されました。ストレッチをする生徒を巡視しながら、市橋氏は、走る時に使う部位を中心にストレッチを行なうことが大切であることを強調していました。

次に、長距離を走るうえで重要な「腕振り」と「腿上げ」の技術指導がありました。「腕振り」のポイントは、頭が上下しないように腕を振ることで、長距離を走るとき、特にレースの後半の疲れが出てくるときにこそ意識して行なうことが必要である、と説明されていました。また、「腿上げ」は、腰の高さまで上げるようにすることがポイントである、と説明されていました。そして実際に、「腕振り」と「腿上げ」を意識して約20mの往復走の練習を行いました。最初は、「腕振り」と「腿上げ」を意識しすぎてぎこちない動きを見せていた生徒達も、市橋氏の声かけのもとで何度か走る中で、少しずつ「腕振り」と「腿上げ」を習得している様子でした。生徒が「腕振り」と「腿上げ」に慣れてきたところで、10チーム（1チーム8人）に分かれてリレーを行いました。必死になって走っている生徒だけでなく、大声で応援する先生方の様子も印象的でした。

そして、最後に、クールダウンも兼ねて、ゆっくり体育館の中を大きく円になるように4周走りました。走りながら、市橋氏は、少し疲れがでてきているときこそ「腕振り」と「腿上げ」を意識することを強調して生徒に伝えていました。

実技指導終了後、生徒や先生から市橋氏への質疑が行なわれました。運動する前に食べるものや、長距離を走るときの着地はかかととつま先どちらで行なうかなど、専門的な質問が出ました。そして最後に、夢や目標を達成するにはどうしたらよいか、という授業の最初に生徒に問いかけた問題への市橋氏の答えとして、「腕振り」や「腿上げ」などの基本的な技術を大切にして、日々努力を重ねることで夢は叶えられるとお話されました。また、オリンピックは選手として出場するだけでなく、応援やボランティアなど多様な関わり方によって全ての人が参加できるスポーツの祭典であることから、是非2020年

の東京オリンピックに参加してほしい、というメッセージを送られました。

最後に、代表生徒からの感想と謝辞があり、散会となりました。代表生徒は、来月に予定している持久走大会に向けて、市橋氏から教わったことを意識しながら練習をしていきたいという想いと感謝の気持ちを伝えていました。

6 授業の様子



講演の様子



肩甲骨のストレッチの様子



腿上げの高さの確認



腿上げと腕振りを意識した走る練習



リレーの様子



走りながら指導する様子

6. 熊本県 オリンピック・パラリンピック教育推進校 実施報告

(1) 2017 年度 熊本県オリンピック・パラリンピック教育推進校一覧

小学校 (8 校)	熊本市立力合西小学校 熊本市立長嶺小学校 熊本市立白山小学校 熊本市立北部東小学校 熊本市立白坪小学校 菊陽町立武蔵ヶ丘北小学校 小国町立小国小学校 水俣市立袋小学校
中学校 (9 校)	熊本市立長嶺中学校 熊本市立帯山中学校 宇土市立鶴城中学校 南関町立南関中学校 八代市立八代第一中学校 あさぎり町立あさぎり中学校 天草市立本渡中学校 山鹿市立山鹿中学校 甲佐町立甲佐中学校
高等学校 (2 校)	熊本県立鹿本高等学校 熊本県立八代東高等学校
特別支援学校 (2 校)	熊本県立盲学校 熊本県立松橋支援学校

(計 21 校)

(2) 伴走者による実践

1 学校名：熊本県立松橋支援学校

2 実施日時：2017（平成 29）年 11 月 17 日（金）9：00～12：45

3 対象：生徒 51 名、教員 15 名

4 派遣パラリンピアン：堀内 規生 氏

（パラリンピック女子マラソン伴走者 パラリンピックリオデジャネイロ大会 銀メダル）

5 授業内容：講演、実技

2017（平成 29）年 11 月 17 日（金）に、熊本県立松橋支援学校にて、パラリンピックリオデジャネイロ大会の女子マラソンで銀メダルを獲得した道下美里氏の伴走を行なった堀内氏が、講演と実技指導を行いました。

「魔法の絆（ロープ）」というテーマで行われた講演は、自己紹介から始まり、道下氏の映像、オリンピックとパラリンピックの価値、パラリンピックリオデジャネイロ大会に参加したときの思い出、そして、パラリンピックマラソンの伴走者の役割や伴走を行なう際のポイントなどについて、自身の経験や考えを基にお話しされました。特に、会社員として働きながら、伴走者としてのトレーニングも欠かさずに行なうために、毎日 4 時半に起きて、トレーニングをしてから仕事に行き、仕事の後にまたトレーニングを行なっているという堀内氏の日々の生活のお話しの際には、生徒たちから感嘆の声が上がっていました。また、伴走者の役割は目の見えないマラソン選手の「目の代わりになること」であるが、そのためには日々のコミュニケーションや信頼関係が必須であるというお話しや、実際に伴走をする際にかかる言葉の工夫によって選手のペースや調子が変わってくるというお話しなど、普段は聞くことができない伴走者の方のお話に、生徒達だけでなく先生方も聞き入っている様子でした。そして、講演の最後には生徒達へのメッセージとして、堀内氏が伴走者としての生活の中で大切にしている、目標をもつこと、仲間を作り大切にすること、仲間を尊敬すること、早起きすること、栄養のバランスを考えて食事をとること、そして継続して本気で取り組むことの重要性について、お話しされました。

実技指導では、2 人組になり、1 人はアイマスクをしてもう 1 人が伴走用のロープで誘導をする練習を行いました。生徒達は、堀内氏の合図とともに 2 人で協力して校庭に置いたコーンを避けながら進む中で、アイマスクをして目の見えない人の世界を経験するとともに、声とロープを用いて目の見えない人の誘導を行なうことの難しさを感じている様子でした。最初は、恐る恐る歩き、とまどっている様子でしたが、少しずつ慣れてくると、スピードを上げて走っている生徒もいました。生徒と一緒に先生も参加しており、うまくコーンを避けることができたりゴールに無事にたどり着けたりした際には、大きな歓声が上がっていました。

実技指導の後には、質疑応答が行われました。生徒からは、疲れずに長い距離を走る技術、堀内氏が伴走者として活動している理由、さらには道下氏と接する中で感じた目の見えない人が持つ力について質問がでました。それぞれの質問に堀内氏は、同じペースを保ち、長い距離を疲れずに走るには腕の力を抜いてなるべく楽な状態で走るとよいこと、道下氏が本気で取り組んでいることが自身の伴走者として活動するモチベーションになっていること、そして、道下氏が挨拶の声でその人が知り合いかどうかを判断できるなど音を聞き分ける能力に秀でている、と回答していました。質疑応答の後には、生徒からの謝辞があり、散会となりました。

6 授業の様子



講演の様子



会場の様子



伴走の指導①



伴走の指導②



伴走の練習②



伴走の練習③



質疑応答①



質疑応答②

< ワークショップ 実施報告 >

1. 地域ワークショップ

【 札幌市 ワークショップ 】

日時：2018（平成30）年3月6日（火）15時00分～16時50分

会場：WEST19 5階 講堂

参加者：約40名

プログラム：

- 15：00～15：05 開会挨拶 札幌市教育委員会 学校教育部 指導主事 岩田 悟 氏
- 15：05～15：30 「オリンピック・パラリンピック教育推進事業」実践報告
上野幌小学校及び福住小学校の先生
- 15：30～16：15 ボッチャ体験会
北海道ボッチャ協会理事長 樋口 幸治 氏
- 16：15～16：50 パラリンピック教育に関する研修会
日本財団パラリンピックサポートセンター 山本 恵理 氏
- 16：50～16：55 閉会挨拶

開会行事では、札幌市教育委員会学校教育部指導主事の岩田氏より、主催者挨拶がありました。

続いて、「オリンピック・パラリンピック教育推進事業」実践報告では、上野幌小学校と福住小学校の2校の先生方がオリ・パラ教育の実践を報告されました。上野幌小学校からは、1月31日（水）に、宮部保範氏（スピードスケート：オリンピックアルペールビル大会、リレハンメル大会出場）を招いて開催されたスケートの実技指導について報告が行われました。また、総合的な学習の時間や道徳の授業を活用したオリ・パラ教育の報告も行われました。元オリンピックに直接スケートを教わったり、オリ・パラ教育で学んだことを保護者の前で発表する機会を得たりした結果、実践後のアンケートの「オリンピックに関するイベントに参加してみたいか」という質問に対しては、9割以上の子どもたちが「参加したい」と回答したとの報告がありました。子どもたちのオリンピックに対する意識の向上がみられ、非常に効果的な実践であったことが伺えました。

福住小学校からは、2月16日（金）に、阿部雅司氏（スキーノルディック複合：オリンピックリレハンメル大会金メダル）を札幌オリンピックミュージアムに招いて開催されたオリ・パラ教育の実践が報告されました。スキージャンプの体験型施設では、多くの子どもたちが阿部氏の指導を受け、元オリンピックの偉大さを身近で感じる事ができたようでした。その他にも、体育の授業で模擬オリンピックを開催し、全員が楽しめるルールを子どもたち自身で考えたり、入賞者には子どもたちが作った金メダルや賞状を授与するなど、共生や多様性を認め合う学習が展開できたようでした。

実践報告の後には、パラリンピック教育研修会へと移りました。北海道ボッチャ協会理事長である樋口氏らを中心に、ボッチャ競技についての説明が行われました。その後、先生方同士でチームを編成して、実際にボッチャ体験が行われました。馴染みのない競技であったために、先生方からは最初のうちは「難しい」という声が上がっていましたが、ゲームを繰り返すうちに、次第にチームで作戦を考えるようになり、より多くの得点をとるための投げ方について話し合う場面も見られるようになりました。難しい局面をうまく切り抜けることができたときには、大きな歓声が上がっていました。

最後に、日本財団パラリンピックサポートセンターの山本氏より、国際パラリンピック委員会が制作

した教材についての紹介がありました。特に「I'm POSSIBLE」は、小学校高学年を対象とした教材ということで、研修会に参加された先生方は大変興味深く、話を聞かれていました。



実践報告会の様子①



実践報告会の様子②



ボッチャ体験会の様子①



ボッチャ体験会の様子②



ボッチャ体験会の様子③



山本 恵理 氏

【 岩手県 ワークショップ 】

日時：2018（平成 30）年 2 月 15 日（木）13:30～16:30

会場：サンセール盛岡

主催：岩手県教育委員会、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：23 名

プログラム：

13:30～13:35 主催者挨拶

岩手県教育委員会事務局保健体育課総括課長 荒木田 光孝 氏

13:35～14:45 グループごとの実践報告・協議・発表

14:45～15:05 講評・実践事例紹介

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

主幹研究員 吉永 武史 氏

研究員 岡田 悠佑 氏

15:05～15:20 休憩

15:20～16:25 シンポジウム「Road to Tokyo 2020」

コーディネーター

吉永 武史 氏

シンポジスト

オリンピック北京・ロンドン大会 フェンシング日本代表

千田 健太 氏

パラリンピックバンクーバー大会 チェアスキー大回転座位日本代表

横澤 高德 氏

16:25～16:30 連絡

16:30～16:35 閉会挨拶

開会行事では、岩手県教育委員会事務局保健体育課総括課長の荒木田氏より主催者挨拶がありました。

続いて、参加された推進校の先生方を 3 つのグループに分け、今年度の各校におけるオリ・パラ教育の実践の報告と課題について協議が行われました。先生方からは、各校でオリ・パラ教育を行う際の工夫として、事前学習としてオリンピック・パラリンピックの価値や歴史についての授業を行ったこと、その際にスポーツ庁の資料（「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料」）を活用したこと、DVD や You Tube を活用したことなどが挙げられました。また、課題としては、年間の教育課程の中でオリ・パラ教育をどのように位置づけるか、学校全体でオリ・パラ教育に取り組むにはどうすればよいか、学校に来てもらう元オリンピック・パラリンピアンと事前に打ち合わせを行うにはどうすればよいか、継続的にオリ・パラ教育を行うにはどうすればよいか、などが挙げられました。また、今後のオリ・パラ教育の発展に向けて、元オリンピック・パラリンピアンだけでなく、オリンピック・パラリンピック競技大会を支える大会関係者などの方々を活用することで、より多様なオリ・パラ教育の実践が行えるのではないか、というアイデアも出ました。

協議の後には、本センター主幹研究員の吉永氏による講評、同研究員の岡田氏による全国のオリ・パラ教育の実践報告が行われました。



協議の様子①



協議の様子②

休憩後、「Road to Tokyo 2020」というテーマで、元オリンピックの千田健太氏（オリンピック北京・ロンドン大会フェンシング日本代表）、パラリンピアン横澤高德氏（パラリンピックバンクーバー大会チェアスキー大回転座位日本代表）によるシンポジウムが行われました。



千田 健太 氏



横澤 高德 氏

千田氏、横澤氏からは、オリンピック・パラリンピック競技大会に参加したときの思い出や苦労したことなどの報告の後に、コーディネーターの吉永氏のもとで、オリンピック・パラリンピック競技大会の裏話、東日本大震災のときの取り組み、各種学校でオリ・パラ教育を行ううえで大切にしていること、さらには子どもたちに伝えたいことなどについてのお話がありました。フロアからの質疑応答では、パラリンピック競技大会での障がいの区分に関する不正や、これまで指導を受けた中で感銘をうけた指導者の言葉などについての質問が出ました。

最後に、岩手県教育委員会事務局の菊池氏からご挨拶をいただき、閉会となりました。



シンポジウムの様子



集合写真

【 静岡県 ワークショップ 】

日時：2018（平成 30）年 2 月 21 日（水）13 時 30 分～16 時 30 分

会場：静岡県教育会館

主催：静岡県教育委員会、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：約 40 名

プログラム：

13:30～13:35 主催者挨拶

静岡県教育委員会事務局健康体育課 課長代理 濱村 幸美 氏

13:35～14:15 中核拠点早稲田大学における取組及び他県における実践事例について

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

主幹研究員 吉永 武史 氏

研究員 岡田 悠佑 氏

14:15～14:40 静岡県における取組について

静岡県教育委員会事務局健康体育課 学校体育班

教育主査 鈴木 淳矢 氏

静岡県オリンピック・パラリンピック教育推進校の先生方

14:40～14:50 休憩

14:50～16:00 「パラリンピック教育啓発事業」について、ボッチャ体験会

朝日新聞社 日高 一成 氏

日本財団パラリンピックサポートセンター 徳留 圭吾 氏

16:00～16:50 オリンピック・パラリンピック教育 推進委員会

開会行事では、静岡県教育委員会事務局健康体育課課長代理の濱村氏より主催者挨拶がありました。

続いて、本センター主幹研究員の吉永氏より、事業概要と今年度、早大オリ・パラセンターが作成したデジタル教材（「夢に向かって 車いすアスリートの挑戦」：副島正純氏を取り上げたパラリンピック教育の教材）の紹介がありました。加えて、本センター研究員の岡田氏より、静岡県以外のオリ・パラ教育の実践事例の紹介がありました。

さらに、静岡県教育委員会事務局の鈴木氏とオリ・パラ教育推進校の 3 名の先生方より、本年度の静岡県におけるオリ・パラ教育の取組の紹介がありました。今年度、静岡県では、小学校 3 校、中学校 3 校、高等学校 2 校の計 8 校でオリ・パラ教育実践が行われました。静岡県のオリ・パラ教育の目標、各校の取り組みの概要、実践してよかった点、実践するうえで困難であった点などのお話がありました。全てのオリ・パラ教育実践校で熱心に取り組んでいただいたおかげで、これまでにない様々な取り組みが行われたことがわかりました。ただし、元オリンピック・パラリンピアンへの派遣の方法や実際に学校に来ていただく際のやり取りに関しては、課題が多いということも報告されていました。



濱村 幸美 氏



鈴木 淳矢 氏



吉永 武史 主幹研究員



デジタル教材の紹介

休憩後には、朝日新聞主催のパラリンピック教育の促進のための研修が行われました。具体的には、パラリンピックサポートセンターの方によるパラリンピック教育の教材である「I'm POSSIBLE」の紹介と、日本ボッチャ協会の方の指導によるボッチャ体験会が行われました。



「I'm POSSIBLE」の紹介



ボッチャ体験①



ボッチャ体験②



ボッチャ体験③

【 岐阜県 ワークショップ 】

日時：2018（平成30）年2月16日（金）13時00分～16時30分

会場：OKB ふれあい会館 3F 大会議室

主催：岐阜県教育委員会、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：約50名

プログラム：

13:00～13:05 主催者挨拶

岐阜県教育委員会 体育健康課 課長 野田 正明 氏

13:05～13:25 オリンピック・パラリンピック教育について

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
副センター長 深見 英一郎 氏

13:25～13:30 岐阜県のオリンピック・パラリンピック教育について

岐阜県教育委員会 体育健康課 上田 和伸 氏

13:30～13:35 実践報告会準備

13:35～16:00 オリ・パラ教育実践校の実践報告会

岐阜県立岐阜商業高等学校、岐阜県立大垣南高等学校、岐阜県立関高等学校
岐阜県立恵那高等学校、岐阜県立益田清風高等学校、岐阜県立岐阜盲学校
岐阜県立岐阜聾学校

16:00～16:20 質疑応答

16:20～16:30 連絡事項

16:30 閉会

開会にあたり、岐阜県教育委員会体育健康課課長の野田氏より、「平昌オリンピックが連日報道され、大いに盛り上がりを見せている中で、ますますスポーツに注目が集まっており、これから2020東京オリンピックに向けてより一層スポーツの価値や意義を子どもたちへ伝えていくことが大きな意味を持つ。岐阜県においても本事業を通して、その役目を果たしていきたい」と、ご挨拶をいただきました。

オリ・パラ教育については、本センター副センター長の深見氏が、講演を行いました。スポーツ庁委託事業の概要説明や、オリ・パラ教育についての講義、昨年度および今年度の早大オリ・パラセンターが取り組んできた実践事例の紹介などを話しました。

続いて、岐阜県教育委員会体育健康課の上田氏から、岐阜県ではオリ・パラ事業推進にあたり、既存の教育活動や学校の特色を活かした実践を重視し今年度の活動を推進してきた旨の話をされました。その後、今年度推進校である岐阜県立岐阜商業高等学校・岐阜県立大垣南高等学校・岐阜県立関高等学校・岐阜県立恵那高等学校・岐阜県立益田清風高等学校・岐阜県立岐阜盲学校・岐阜県立岐阜聾学校の代表の先生方による実践報告がありました。

基本的にはいずれの学校においても、元オリンピック・パラリンピアンを招いての講演会という形式が取り入れられていました。それ以外にも、保健体育科だけでなく、英語科、地歴・公民科、数学科、理科、家庭科などの教科の学習や総合的な学習の時間を活用したオリ・パラ教育に取り組まれていました。さらには、部活動や文化祭などの学校行事と連携されてオリ・パラ教育に取り組まれていたことが印象的でした。地域の特別支援学校との連携によるインクルーシブ教育の展開、着物など自国の文化を

再認識し発信していく活動、さらには定期テストにおいてオリンピックやパラリンピックに関する問題を出題するなど、多岐にわたる実践報告が行われました。また、学習効果を挙げる工夫として、講演を行う元オリンピック・パラリンピアン競技について、事前に生徒たちに紹介を行ったことも報告いただきました。実践後に生徒達に実施したアンケート調査から、オリンピック・パラリンピックへの興味や関心が大きく向上したこと、生徒自身の経験と照らし合わせてアスリートの言葉を実生活へと生かしていこうとする感想が寄せられていたことなど、非常に有意義な実践が行われたことが伺えました。

会場にお越しいただいた学校関係者の先生方も、大変興味深く実践報告に耳を傾けていらっしゃいました。報告会で実施したアンケートには、ぜひ自身の学校でも実践したいという感想も寄せられ、今年度の推進校をはじめとして他の学校にもオリ・パラ教育が推進されてきていることを感じる会となりました。

最後に、上田氏より、「2020 東京オリンピックに向けて、これからさらに大きな波がやってくる。その中で学校教育は何ができるのか、各学校でどのような取組みができるかを考えて、スポーツの持つ大きな影響力を活用しながら取り組んでいきたい」という閉会の言葉があり、散会となりました。



野田 正明 氏



上田 和伸 氏



推進校代表の先生方



会場の様子

【 広島県 ワークショップ 】

日時：2018（平成 30）年 3 月 2 日（金）9 時 30 分～16 時 30 分

会場：広島県スポーツ会館

主催：広島県コンソーシアム、早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

参加者：約 40 名

プログラム：

9:30～9:35 主催者挨拶

広島県教育委員会事務局教育部スポーツ振興課 学校体育係 係長 光橋 健 氏

9:35～10:30 パラリンピック教育の推進について

パラリンピックサポートセンター 山本 恵理 氏

10:30～11:45 ボッチャ体験会

11:45～12:15 平成 29 年度広島県コンソーシアム推進校事業について

広島県教育委員会事務局教育部スポーツ振興課 学校体育係 指導主事 吉岡 智厚 氏

12:15～13:30 休憩

13:30～14:00 オリンピック・パラリンピック教育プログラムについて

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター 副センター長 深見 英一郎 氏
研究員 岡田 悠佑 氏

14:00～16:20 平成 30 年度広島県におけるオリンピック・パラリンピック教育の推進について

参加された先生方によるグループワーク

16:20～16:30 講評

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター 副センター長 深見 英一郎 氏

開会行事では、広島県教育委員会事務局の光橋氏より主催者挨拶がありました。

続いて、パラリンピックサポートセンターの山本氏より、パラリンピック教育の教材「I' m possible」の紹介などを通したパラリンピック教育の推進方法について講義が行われました。さらに体育館に移動し、ボッチャの体験会が行われました。

ボッチャ体験会終了後は、広島県教育委員会事務局の吉岡氏より今年度の事業報告が行われました。今年度は、30 校がオリ・パラ教育の推進校に指定され、14 名の元オリンピック・パラリンピアンの方々を学校にお招きし、オリ・パラ教育の実践を行いました。



光橋 健 氏



ボッチャ体験の様子



吉岡 智厚 氏

講義後は、6つのグループに分かれて、オリ・パラ教育の実践計画の作成及び発表を行いました。最後に、本センター副センター長の深見氏から講評があり、散会となりました。



グループワークの様子

[illegible]

実践計画②



発表の様子③

【 熊本県 ワークショップ（市民フォーラム） 】

日時：2018（平成 30）年 3 月 4 日（日）13 時 00 分～16 時 50 分

会場：熊本市国際交流会館

主催：熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、NPO 法人ひとづくりくまもとネット

参加者：約 100 名（学校関係者約 20 名、高校生等一般市民約 80 名）

プログラム：

13：00～13：15 開会挨拶

熊本県教育庁教育指導局 体育保健課長 西村 浩二 氏

13：15～14：15 オリンピアン・パラリンピアンによる講演①

「東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けて」

オリンピック北京大会（2008 年）、ロンドン大会（2012 年）競泳 出場
伊藤 華英 氏

14：15～14：25 休憩

14：25～15：25 オリンピアン・パラリンピアンによる講演②

「パラトーク！～2020 と未来に向かって～」

パラリンピックアテネ大会（2004 年）、ロンドン大会（2012 年）車いすマラソン 出場
花岡 伸和 氏

15：30～16：45 シンポジウム「熊本からオリンピック・パラリンピック・ムーブメント」

コーディネーター 熊本大学教育学部生涯スポーツ福祉課程 教授 中川 保敬 氏
シンポジスト 伊藤 華英 氏
花岡 伸和 氏

オリンピックロンドン大会（2012 年）陸上競技男子 4×100m リレー 出場
江里口 匡史 氏

16：45～16：50 閉会挨拶

熊本県では、ワークショップとして、主に本年度の実践校の先生及び生徒を対象としたフォーラムが開催されました。

開会行事では、熊本県教育庁教育指導局体育保健課長の西村氏より、「2020 年東京オリンピック・パラリンピック大会に向けて、熊本からもスポーツの素晴らしさを子どもたちに伝えていくための醸成を図り、日本全体で東京大会を成功させたい」旨の、ご挨拶がありました。

講演会では、最初に伊藤氏が登壇されました。始めに、2 月 25 日まで熱戦が繰り広げられていたオリンピック平昌大会の様子を紹介していただきました。その後、競泳との出会いや、19 歳でアテネオリンピック出場を逃すという大きな挫折から、いかにして気持ちを切り替え困難に立ち向かってきたかについて話していただきました。伊藤氏は、「自分の気持ちがしっかりとしていれば、必ず困難も乗り越えられる」という強い信念によって、怪我で苦しんだときにも冷静に自らを分析し、ロンドンオリンピックの代表を獲得することができたそうです。自分がどうなりたいたのかを常にイメージすることや、自分で価値観を作り上げていくことが大切だと話していただきました。

講演会の後半は、花岡氏が登壇されました。花岡氏は、高校生のときにバイクの事故によって脊椎を損傷し、車いすでの生活を余儀なくされました。入院直後は、自分で食事をするといった当たり前にで

きていたことさえできなくなり、悔しさとやりきれなさでいっぱいだったそうです。しかし、自力で食事をすることができた、動けるようになった、といった小さな成功体験を重ねていくことで立ち直り、車いすマラソンという夢中になれるものに出会い、さらにはパラリンピック出場という大きな夢の実現を果たすことができたそうです。車いすマラソンとの出会いがあったからこそ、自己肯定感や自信を手に入れることができ、自分を好きになれたと話してくださいました。小さなチャレンジでも失敗をしないチャレンジでも構わないので、そういったものを積み重ねていくことで大きな一歩を達成してほしいと話していただきました。

続いて、上述の2名に江里口氏を加えた3名の元オリンピック・パラリンピアンでシンポジウムが行われました。コーディネーターは、熊本大学教授の中川氏が行いました。それぞれのシンポジストからは、自らの経験談を踏まえながら、オリンピック・パラリンピックに出場することができた秘訣や、挫折しそうになったときの乗り越え方について話していただきました。また、「オリンピック・パラリンピックに出場するためには、どれだけ強く気持ちを持ち続け、具体的にビジョンや計画を思い描くことができるか、当たり前のことを当たり前に実行できるか、といったことが大切である」ことや、「その過程で挫折を経験することもあるが、努力してきたことは無駄にはならないこと、辛い環境でも支えてくれる人や応援してくれる人の存在を大切にすることで、また前を向くことができる」などといった考えを話していただきました。2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会をどのように考えるかという質問に対しては、「東京だけの大会ではなく、日本全体の大会だと思って全国民で盛り上げていきたい。そして、オリンピック・パラリンピックを肌で感じることで、多くの感動や価値に触れ人々の人生の活力となしてほしいし、そのような大会にしていきたい」というメッセージをいただきました。



伊藤 華英 氏



花岡 伸和 氏



シンポジウムの様子①



シンポジウムの様子②

2. 全国ワークショップ

日時：2018（平成 30）年 3 月 5 日（月）14 時 00 分～17 時 20 分

会場：筑波大学東京キャンパス文京校舎

主催：筑波大学、日本体育大学、早稲田大学

参加者：約 60 名

プログラム：

14:00～14:05 開会挨拶

筑波大学 准教授 宮崎 明世 氏
スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課 課長 勝又 正秀 氏

14:05～14:50 各大学担当の地域拠点における事業概要および全国フォーラム報告

筑波大学 助教 大林 太朗 氏
日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
特別研究員 佐藤 洋 氏
早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
研究員 岡田 悠佑 氏

14:50～15:05 パラリンピック教育普及啓発事業報告

朝日新聞社 メディアビジネス局 次長 岩佐 正俊 氏

15:05～15:20 東京都における事例紹介

東京都教育庁 指導部指導企画課 指導主事 小宮山 詠美 氏

15:20～15:30 休憩

15:30～16:45 報告会及びグループ討議

各オリンピック・パラリンピック教育推進地域の教育委員会の先生方

16:45～17:15 各グループで議論された内容の報告

17:15～17:20 閉会挨拶

日本体育大学 教授 関根 正美 氏

開会行事では、筑波大学准教授の宮崎氏、及びスポーツ庁オリンピック・パラリンピック課課長の勝又氏より挨拶がありました。

続いて、全国中核拠点の筑波大学、日本体育大学、早稲田大学より、今年度の取り組みの報告が行われました。具体的には、各大学の担当地域における取り組みだけでなく、教材開発、調査研究などの各拠点独自の取り組みも紹介いただきました。

さらに、朝日新聞社の岩佐氏及び東京都教育庁の小宮山氏より、今年度の取り組みの報告が行われました。岩佐氏からは朝日新聞社が推進しているパラリンピック教育の普及活動の概要やパラリンピック教育に関する意識調査の結果について紹介がありました。小宮山氏からは、東京都のオリ・パラ教育の方針や実態について紹介いただきました。



勝又 正秀 氏



大林 太朗 氏

休憩後には、参加された教育委員会の先生方を5つのグループに分け、討議が行われました。各グループでは、自己紹介の後、先生方にお持ちいただいた各地域の実践報告書をもとに実践報告が行われました。そして、各地域の特色ある取り組みをご紹介いただいた後、各種学校でオリ・パラ教育を実施した際に挙げられた課題を共有しました。さらに、それぞれの課題に対する解決策を検討し、来年度の取り組みの方針について情報交換を行いました。

グループ討議後は、各グループの代表者による発表が行われました。各グループからの報告では、オリ・パラ教育の重要性や効果は先生方に浸透してきているが、推進校の拡大や継続的なオリ・パラ教育の実施のためには、取り組みやすい環境づくりや学校全体での情報共有、さらには地域や企業との連携の模索などが課題として挙げられました。また、来年度に向けて、なるべく早い時期にセミナーを実施して実践に向けた準備の時間を十分に確保することが重要であるという意見も出ました。

なお、今回の全国ワークショップには、来年度以降に本事業への参加を検討いただいている地域の教育委員会の先生方も参加されており、今年度の事業報告やグループ討議を通して、事業の趣旨や実際に各種学校でオリ・パラ教育を実施するうえでの困難や工夫について情報提供が行われました。

最後に、日本体育大学の関根氏より閉会の挨拶があり、散会となりました。



グループワークの様子



発表の様子



関根 正美 氏

< 全国フォーラム 実施報告 >

日時：2018（平成30）年2月24日（土）13時30分～16時05分

会場：カンファレンス ASC（博多駅徒歩4分）

主催：早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター、スポーツ庁

プログラム：

13:30～13:40 開会挨拶

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
センター長 友添 秀則 氏
スポーツ庁 オリンピック・パラリンピック課
課長 勝又 正秀 氏
福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課
課長 寺崎 雅巳 氏

13:40～14:40 地域拠点におけるオリンピック・パラリンピック教育の取組

福岡県の取組 福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課
指導主事 物部 倫明 氏
長崎県の取組 長崎県教育庁体育保健課学校体育班
参事 宮田 幸治 氏
札幌市の取組 札幌市教育委員会学校教育部教育課程担当課
指導主事 岩田 悟 氏

14:40～14:50 休憩

14:50～16:00 オリンピアン・パラリンピアンによる講演

「今、子どもたちに伝えたい、オリンピック・パラリンピックから得たもの」

日本大学文理学部体育学科教授、同大学体操競技部監督
オリンピックソウル大会（1988年）体操競技男子団体総合銅メダル
水島 宏一 氏

早稲田大学レスリング部監督
オリンピックアトランタ大会（1996年）男子レスリング・フリー銅メダル
太田 拓弥 氏

愛知県立名古屋盲学校教諭
パラリンピックアテネ大会（2004年）、リオデジャネイロ大会（2016年）
柔道 60kg 級銀メダル

廣瀬 誠 氏

16:00～16:05 閉会挨拶

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
副センター長 深見 英一郎 氏

開会挨拶では、友添氏より、本フォーラムの意義に関する説明と登壇いただく方の紹介がありました。勝又氏からは、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決定して既に5年が経過している状況で、少しずつ本事業が軌道にのってきており、これからも積極的に全国でオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを起こすために働きかけていきたい、とご挨拶がありました。寺崎氏からは、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を福岡県も一緒に盛り上げていきたい、そして、2020年に向けた取り組みが大会後にレガシーとして残っていくことを祈念している、とご挨拶がありました。



友添 秀則 センター長



勝又 正秀 氏



寺崎 雅巳 氏

第一部の「地域拠点におけるオリンピック・パラリンピック教育の取組」では、福岡県、長崎県、札幌市の学校におけるオリ・パラ教育の実践の取組が紹介されました。物部氏からは、元オリンピックを講師として招いて行ったハードル走や器械運動の実践、さらには中学校でのブラインドサッカーや特別支援学校でのゴールボールの実践が紹介されました。また、全校集会や体育以外の教科での取り組みを実施することで、学校全体の意識を高めることができたという報告もされました。宮田氏からは、長崎県の学校におけるオリ・パラ教育実践の事例の紹介とともに、オリ・パラ教育の成果をより高めるためには、事前・事後指導の充実が重要であるという報告がありました。岩田氏からは、オリ・パラ教育を実施するうえで、札幌らしさ（雪国、大都市、オリンピック開催都市など）を重視した取り組みの報告がありました。具体的には、札幌オリンピックミュージアムやカーリングスタジアムなどのスポーツ関連施設の活用や冬季種目の元オリンピック・パラリンピアンなどの活用などの実践が挙げられました。また、3名とも、持続可能なオリ・パラ教育の実践が重要であると強調されました。



物部 倫明 氏



宮田 幸治 氏



岩田 悟 氏

第二部の講演会「今、子どもたちに伝えたい、オリンピック・パラリンピックから得たもの」では、水島宏一氏（体操）、太田拓弥氏（レスリング）、廣瀬誠氏（障がい者柔道）から、オリンピック・パラリンピック競技大会に参加した経験を通して学んだこと、そして、今の子どもたちに伝えたいことに関する講演がありました。

水島氏は、競技生活において様々な国に遠征を行う中で、食事や生活様式などの文化の違いに直面するとともに、華やかなスポーツの祭典であるオリンピックの開催の裏で貧困や格差に苦しむ一部の国民たちの生活も目の当たりにしたそうです。このような現実を目の当たりにする中で、自分が体操を行うことができる環境にいることの幸せを感じるとともに、体操に集中して取り組める環境を作ってくれて

いる周囲の人々への感謝の気持ちを持つことができた、ということでした。そのため、子どもたちに伝えたいこととして、1人では夢を叶えることは難しい、だからこそ、周囲への感謝と挑戦し続ける姿勢が大切であるとお話されました。

太田氏は、自らのレスリング経験を通して、最後まで諦めないことでチャンスは得られること、と同時に挑戦し続けることを支えてくれる周囲の人々への感謝の気持ちを忘れてはいけない、ということを感じたそうです。また、現在、太田氏がダウン症及び自閉症児の子どものためのレスリング教室を主宰している背景には、ハンディキャップがあっても強い気持ちを持って生きていってほしい、という太田氏の想いがあるということでした。

廣瀬氏は、自らが障がいを負った経緯を紹介するとともに、柔道を通して、自己肯定感と感謝の心を学ぶことができたそうです。また、「障がいは不便だけど、不幸ではない」というヘレン・ケラーの言葉を紹介し、自分も楽しそうに生きていると思われるような人間になりたいとお話されていました。



水島 宏一 氏



太田 拓弥 氏



廣瀬 誠 氏

最後に、本センター副センター長の深見氏より閉会の挨拶がありました。深見氏は、このフォーラムを通して学んだことを是非、子どもたちに還元して欲しいと述べるとともに、参加していた高校生に感想を求めました。指名を受けた高校生は、自分も夢をもって感謝の気持ちを忘れずに日々生活していきたいと述べ、盛大な拍手とともに散会となりました。



集合写真

＜ 平昌オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた 大韓民国におけるオリンピック・パラリンピック教育の 実態調査 実施報告 ＞

日時 : 2017 (平成 29) 年 9 月 14 日 (木) ～9 月 16 日 (土)

調査地 : 大韓民国 ソウル市、平昌、全羅南道

実施者 : 青木彩菜 (主任研究員)、岡田悠佑 (研究員)

目的 : 2018 年平昌オリンピック・パラリンピック大会 (以下、平昌大会) に向けた韓国におけるオリ・パラ教育の取り組みの実態を明らかにし、今後の日本のオリ・パラ教育の展開の方向性を探ること

スケジュール :

日付	2017. 9. 14	2017. 9. 15	2017. 9. 16
調査内容	インタビュー①Youngjin Choi 氏 (平昌大会組織委員会 Education Team リーダー)	実践②全羅南道靈光郡 公立白岫中学校 (Beaksu Middle School)	施設視察①ソウル市 Seoul Olympic Museum
	実践①ソウル市 公立清潭中学校 (Cheongdam Middle School)	インタビュー② 公立白岫中学校生徒 (3 名) インタビュー③Arram Kim 氏 (平昌大会組織委員会 Education Team プロジェクトマネージャー)	

1 日目は、平昌大会組織委員会とソウル市にある公立清潭中学校を訪問しました。平昌大会組織委員会では、Education Team のリーダーを務める Youngjin Choi 氏への韓国におけるオリ・パラ教育プログラムの概要や現状についてのインタビューを実施しました。3 年前から始められた平昌大会組織委員会による学校でのオリ・パラ教育は、2015 年度に 4 校、2016 年度に 20 校で行われ、今年度は 180 校での実施を予定しているということでした。また、ソウル市にある公立清潭中学校では、カーリングの元韓国代表監督で同校勤務の体育教員 Choi Jeachun 氏によるオリ・パラ教育の実践授業を参観しました。冬季スポーツに親しみのない生徒たちに対して少しでも関心をもってもらうために、大きなスクリーンを使ってルールの解説を行った後に、実技の指導が行われました。



平昌大会組織委員会 入口



Youngjin Choi 氏



カーリングの授業の様子

2 日目は、韓国南部の全羅南道靈光郡にある公立白岫中学校を訪問しました。全校生徒 30 人ほどの中学校でしたが、人工芝のグラウンドなどの体育施設が充実していました。授業では、平昌大会組織委員会の Education Team のプロジェクトマネージャーを務める Arram Kim 氏らによるオリ・パラ教育が行われました。オリンピック・パラリンピックの価値や冬季スポーツについて、さらにはスポーツに関連する仕事などについての講義中心の実践授業でした。初めて冬季スポーツを見る生徒もいるようで、とても集中して講義を聴くとともに積極的に手を挙げて質問に答えていました。また、同校の教員も組織委員会スタッフにとっても協力的で、一緒に授業を盛り上げていました。他方で Arram Kim 氏の話では、韓国全土の 180 校の学校を 3 人の担当で回らなければならない、オリ・パラ教育実施上の苦労は多いとのことでした。



人工芝のグラウンド



授業の様子



トーチに興味津々の生徒

3 日目は、ソウル市内にある Seoul Olympic Museum を訪問しました。1988 年のソウルオリンピックを記念して建てられた施設で、オリンピック・パラリンピックの歴史、ソウルオリンピックの招致から開催に至る経緯、さらには韓国におけるソウルオリンピックの影響などが紹介されていました。また、児童・生徒用の学習室も設置されており、施設を利用した学習が行われているとのことでした。



Seoul Olympic Museum 内部



学習室①



学習室②

これらの訪問先以外にも、金浦空港に平昌オリ・パラのブースが設けられていたり、ソウル駅前にある巨大スクリーンに平昌大会で実施される種目を紹介するカラフルな映像が流されていたりしました。今回の訪問を通して、韓国全体で平昌大会を盛り上げていこうという雰囲気が伝わってきました。



金浦空港のブース



ソウル駅前の映像（スキージャンプ）

< パラリンピック教育用デジタル教材の作成 実施報告 >

作成の意図：

平成 28 年度に、各学校に元オリンピック・パラリンピアンを派遣してオリ・パラ教育を実施した際に、特にパラリンピアンに対する児童・生徒の関心が低く、盛り上がりには欠ける傾向が確認されました。他方で、パラリンピアンの方々がオリ・パラ教育の実践の中で映像を活用した際に、児童・生徒の目の色が変わり、大きな成果が得られました。そこで、パラリンピック教育の促進のために、従来のパラリンピック競技大会の記録や歴史などを紹介するような内容ではなく、パラリンピアン的人物像に迫った映像資料の作成を試みました。具体的には、車いす陸上競技の副島正純氏（4×400m リレー：パラリンピックアテネ大会 3 位、マラソン：パラリンピック北京大会 12 位、ロンドン大会 4 位、リオデジャネイロ大会 11 位）を取り上げ、障がいを負うまでの経緯、障がいを乗り越えてパラリンピック競技大会の出場に辿り着くまでの経緯、またその過程で経験した数々の苦悩や挫折、支えてくれた人たちへの感謝の気持ち等を紹介するデジタル教材を作成しました。このデジタル教材を通して、夢や希望、さらには絶対にあきらめない強い心を持ち続けることの大切さを学ぶことができるのではないかと思います。今後、全国の学校に配布して、より効果的なパラリンピック教育の促進につなげていきたいと考えております。



デジタル教材 表紙

今後に向けて

本事業では、全国でのオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの推進に向けて、国内6つの地域の教育委員会の方々と連携して、以下の3つの事業を行いました。

1つ目は、オリ・パラ教育推進地域を対象としたセミナー並びにワークショップを開催しました。全国セミナー及び各地域セミナーでは、各オリ・パラ教育推進地域の教育委員会及び各オリ・パラ教育推進校の先生方にご参加いただき、本事業の概要やオリ・パラ教育の理念、さらにはそれぞれの地域におけるオリ・パラ教育の方針や具体的な進め方に関して情報共有を行いました。また、各オリ・パラ教育推進地域の実践終了後には、地域ワークショップ並びに全国ワークショップを開催し、オリ・パラ教育の実践の成果及び課題などについて情報共有を行いました。しかし、地域セミナーに参加いただいた先生方の中には、具体的なオリ・パラ教育の実践のイメージに関しては十分に理解が深まらなかった、という方もいらっしゃいました。そのため今後は、実践例を充実させ、オリ・パラ教育の理解がより深まるようなセミナー及びワークショップを開催していきたいと思います。

2つ目は、各オリ・パラ教育推進校におけるオリ・パラ教育実践の支援を行いました。各オリ・パラ教育推進地域では、複数の各種学校をオリ・パラ教育推進校に指定し、オリ・パラ教育が実施されました。本研究センターでは、これまでの実践の反省を踏まえ、元オリンピック・パラリンピアンが各オリ・パラ教育推進校で講演や実技指導を行うにあたって、事前及び事後指導を行うことで、子ども達の理解がより深まると考えました。そこで、事前及び事後指導のための多様な指導案や教材を作成及び提供し、それらを活用したオリ・パラ教育を実践していただきました。また、パラリンピック教育を充実させるためにデジタル教材も作成いたしました。今後も、引き続き事前及び事後指導を充実させるための授業プログラムの開発等を通して、効果的かつ継続的なオリ・パラ教育の実現を目指していきたいと思います。

3つ目は、市民のオリンピック・パラリンピックへの機運を高めるための全国フォーラムを開催しました。第一部では、3つのオリ・パラ教育推進地域の教育委員会の先生方にご登壇いただき、各地のオリ・パラ教育の取り組みをご紹介いただきました。第二部では、3名の元オリンピック・パラリンピアンの方々にご登壇いただき、「今、子どもたちに伝えたい、オリンピック・パラリンピックから得たもの」というテーマでお話いただきました。フォーラム当日は、多くの教育委員会関連の方々にご参加いただいた一方で、一般市民の方々の参加はあまり多くはありませんでした。今後、本事業の趣旨である、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントを全国で展開していくためにも、市民の方々への働きかけも積極的にしていきたいと思います。

最後に、本事業の推進メンバーとしてご協力いただいたオリ・パラ教育推進地域の教育委員会並びに関係団体の方々、そしてオリ・パラ教育推進校の先生方には、大変なご尽力をいただきました。心より感謝申し上げます。関係の皆様方に謝意を示しつつ、本事業が2020年オリンピック・パラリンピック東京大会の成功に寄与することを祈念し、結びの言葉とさせていただきます。

平成30年3月

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター
副センター長 深見 英一郎

本事業の構成員

センター長	友添 秀則	早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
副センター長	深見 英一郎	早稲田大学スポーツ科学学術院 准教授
主幹研究員	吉永 武史	早稲田大学スポーツ科学学術院 准教授
客員研究員	竹村 瑞穂	日本福祉大学 准教授 早稲田大学スポーツ科学研究センター 招聘研究員
研究員	小野 雄大	早稲田大学スポーツ科学学術院 助手
	青木 彩菜	早稲田大学スポーツ科学学術院 研究助手
	岡田 悠佑	早稲田大学スポーツ科学学術院 研究助手
	根本 想	早稲田大学スポーツ科学研究センター 招聘研究員

平成２９年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

平成３０年３月３１日

発行：早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

埼玉県所沢市三ヶ島２－５７９－１５ 早稲田大学所沢キャンパス１００－４２７

TEL/FAX：０４－２９４７－６７２４

Web サイト：<https://www.waseda.jp/prj-w-olypara/>
